

活動報告 「深大寺と国立天文台探訪」

2022—12—5

記 栗屋貴夫

- ◇日時 12月1日(木) 集合 8時45分 所沢駅新宿方面行きホーム
解散 15時 所沢駅
- ◇行程 深大寺見学 ⇒ 山門 ⇒ 鐘楼 ⇒ 本堂 ⇒ 元三大師堂 ⇒ 国宝・釈迦如来像 ⇒
深沙堂 ⇒ 延命観音 ⇒ (昼食) ⇒ 神代植物公園 ⇒ 国立天文台 ⇒
武蔵境駅 ⇒ 所沢駅(解散)
- ◇ガイド 調布市観光協会 2班に分かれてガイド付き 深大寺のみ
国立天文台はコロナ禍のためガイド無し、自由見学
- ◇参加者 22名(男性11名 女性11名)

<はじめに>

年間計画当初は5月実施の予定でしたが、調布市はコロナ禍のためガイド案内は中止するとの方針の為 12月に延期して実施することになりました。

また9月頃ガイド案内を申し込んだときは、まだコロナ対応規制が厳しくて、団体上限人数は20名、密集を避ける為5人グループにガイド1人、ですから20人にガイド4人ということでした。その後規制が緩和されて10人にガイド1人ということになりました。よって今回は2グループに分かれてガイド案内を受けることになりました。

それでも尚「国立天文台三鷹」はコロナ感染予防の為、一般人のガイド案内は受け付けていません。今回はやむなく自由見学となりました。

<所沢駅→東村山駅→国分寺駅→三鷹駅→(バス) 深大寺前>

- 10:20「深大寺バス停」ガイドさんと待合せ。

早速ガイドさんの案内で2班に分かれて深大寺巡り開始、正式名「天台宗別格本山 浮岳山深大寺」天平5年(733)に水神「深沙大王」を祀り法相宗の寺院として創建された。寺を開いた満功上人の両親がこの神様の御利益で結ばれたことが開創の所以であるため、「深沙大王」は縁結びの信仰を集めている。

その後平安時代に天台宗に改まり、功績のあった元三大師を奉安するようになった。

- 参道を通して山門へ、山門は下見をしたときは丁度補修中で萱ぶき屋根を取り換えていました。今回は出来上がっていて山門をくぐる事が出来ました。元禄8年(1695)の普請で境内最古の建物です。



深大寺山門

- 続いて「本堂」へ本尊は宝冠阿弥陀如来を安置しており、頭部に宝冠を戴くもので、天台密教に伝わる金剛界曼荼羅に描かれている特徴的なお姿で、大変貴重なお像である。拝観は出来ず、写真にて説明を受けた。
- 本堂前の銘木「ムクロジ」について。(種子は羽根つきの球、果皮は石鹼に使用する)



深大寺本堂

- 「元三大師堂」
平安時代に活躍した比叡山の高僧、元三大師を祀るお堂。元（1）月3日に縁が深いこと

から元三大師の通称で親しまれており、人並外れた霊力により数々の奇跡を起こしたことから「観音の化身」「厄除け大師」として多くの信仰を集めている。

○ 秘仏「元三大師像」

座像にして2メートル、他に例を見ない巨大なお姿で、僧形の古像の中では日本最大、(秘仏のため今回は拝観出来ず、40年に1回御開帳とのこと)

○ 国宝『銅造釈迦如来像（白鳳仏）』

創建以来何度かの火事にあい、行方不明になっていたが明治42年「元三大師堂」の須弥壇下から再発見され、これにより深大寺の名は日本中に知られるようになり、大正2年に本像は旧国宝指定となった。その後昭和25年の文化財保護法施行で重要文化財となり、平成29年に国宝に指定された。寺院伝来の仏像としては都内寺院唯一にして、東日本最古の国宝仏である。飛鳥時代後期の傑作とされ、青年のような面立ちと流麗な衣の表現と椅子の座像が特徴。(ガラス越しに鑑賞することが出来たが撮影禁止)

○ 「深沙大王堂」

深沙大王は、江戸時代まで深大寺の総鎮守で、このお堂は元三大師堂と同じく参詣の人が絶えなかった。明治の神仏分離令で破却され昭和43年に再建された。「深大寺」の名称の語源は、「深沙大王」に由来するとガイドの説明。



深沙大王堂



深大寺境内の湧き水を利用した手洗い場

<深大寺を巡った後、昼食は400年の歴史を誇る名物の深大寺そばを食した>

いつもは満員御礼の蕎麦屋が本日急激な寒さ襲来でお客さんが少なく待つことなく入店出来、注文品もすぐ出来てゆっくりできたのは幸運であった。

【都立神代植物公園】

武蔵野の面影が残る広さ 48 万㎡の広大な公園。もともとは苗園だったが戦後神代緑地として公開された後、昭和 36 年に神代植物公園と改められ、都内唯一の植物公園。丁度「秋のバラフェスタ」のシーズンが終わり 観るべき花はないかなと諦めていたが園内の紅葉が見頃で景色を見ながら散策、バラ園も春バラほど華やかではないが沢山の種類のバラが咲いていた。「大温室」があったので中に入ると暖かい。さながら熱帯植物園、冬でも南国の別世界。南米のオオオニバスや色とりどりの花が咲いている。



神代植物公園

【国立天文台三鷹】

正式名称は「大学共同利用機関法人 自然科学研究機構国立天文台」という。世界最先端の観測施設を擁する日本の天文学のナショナルセンターである。三鷹キャンパスは国立天文台の本部があり、事務、研究棟施設がある。



「神代植物公園」正門を出て、「国立天文台三鷹」へ住宅街を歩いた。
松本清張の「波の塔」を読むと田舎道で周りは人家もなく畑や樹林が続いていると表現されているが今は住宅が密集している。昭和30年代はまだ高度成長期の初期で土地開発の波が押し寄せる直前だったのだろう。ましてや明治期に麻布に設置した東京天文台が三鷹へ移転して来た大正初期は草茫々の原野だったはずだ、星空も明るく天体観測には好適な土地だったと考えられる。その後天体観測の好適地を求めて、(水沢・野辺山・岡山・石垣島)へと発展し、更に世界の先端研究機関として、国際協力の下、海外(ハワイ・チリ)へと展開したのだろう。日本の天文学研究、その原点・スタート地点が三鷹ということになる。江戸時代が終わって明治時代が始まり、政治経済が大混乱の時、西洋列強に追いつくために、殖産興業、軍備増強、そして科学技術、教育、今考えるとやはり明治・大正の政治家は優秀有能だったと思わざるを得ない。直接国民生活の足しにはならない、不要不急の天体観測にドイツなどから器械を輸入して科学や人材育成に投入したのだから。先見の明があったと言わざるを得ない。
それにしても 構内を歩いていて林が草茫々でタヌキやキツネが生息していそうで、国の予算が不足して手入れが行き届かないで可哀そうと思っていましたが、間違っていました。手つかずの自然のままの森が残っていて貴重な植物が多く、植物を抜いたりすることは禁じられているのだそうです。建物も古いが森も古い。構内の紅葉も見応えがあり、特に並木道の黄葉のトンネルが素晴らしく道に敷き詰められた落ち葉はさながら宝石のようで一幅の絵画でした。

<三鷹国立天文台 14:00→武蔵境駅→国分寺駅→東村山駅→所沢駅 15:00>

天気にも恵まれ初冬の寒さの中充実した一日でした。

今年の活動もこれにて終了しました。

以上

担当：青木(Dグループ)、喜多(Dグループ)、曾部(Dグループ) 栗屋(Dグループ)

出典：「深大寺」につきましては、ガイドさんの説明、及び「深大寺ホームページ」パンフレット「深大寺の主な見所」、「神代植物公園」につきましては、パンフレット「神代植物公園」、「国立天文台」につきましては「国立天文台ホームページ」及びパンフレット「国立天文台三鷹見学ガイド」、松本清張「波の塔」等を参考にしました。